

まいどさん

足寄町商工会青年部

H29.11.1 No.174

経営研修委員会 庄司

☆青年部インタビューリレー☆

第3回は木村祥悟さんです。



プロフィール

木村祥悟（きむらしょうご）

1981年 足寄町出身

1999年 札幌日大高校卒業

2000年 木村建設入社

2003年 京都・匠弘堂入社 社寺建築大工として修行する

2008年 宮城県で木造伝統構法の家づくりを1年間学ぶ

2009年 木村建設入社

2016年 木村建設代表取締役役に就任

一 経歴を教えてください。

高校卒業後、就職を希望しながらも目的がないまま大学へ進み、案の定すぐに中退しました笑。1年間東京に住んでいましたが、これといった就職先もなく翌年足寄に帰省します。それまであまり関心がなかった家業である建築業に身を置きます。当時は、建築の資格もなければ、勉強すらろくにすることがなく用語もなにもわからずに、日々与えられたことをやるだけで、会社の労働力の一部にすらなれていない存在でした。三年目に、ある宮大工さんの著書に出会ったことが転機となり、社寺建築の世界に飛び込みました。もう足寄に帰ってくることはないという覚悟で京都に行き、宮大工としての修業を始めます。北海道から沖縄まで、全国を渡り歩いて仕事をしました。旅仕事では一軒家を借りての共同生活です。私のような見習いは、誰よりも朝早く起きて朝食の準備をし、朝食後には乾いた洗濯物をたたみ、掃除をして現場に向かいます。現場につくと周辺の掃除から始まり、終業後は急いで夕食の買い出しに行き夕食の準備をして、食べ終わると片づけながら風呂を沸かし、先輩がお風呂に入っているときに洗濯をします。最後に風呂に入り、すべての片付けが終わってから自分の道具の手入れをします。プライベートな時間はほぼありませんが、大工としての腕を上げる事だけに集中させてもらえるありがたい環境でした。

4 年が経った頃、家業があり長男である私の行く末を案じて、棟梁が足寄への帰省を勧めてくれました。かなり迷いましたが、帰省を決意します。北海道で宮大工として生業を続けるのは困難だと思い、その後 1 年間東北宮城県で伝統的な大工技術での家づくりを実践している棟梁のもとで勉強させていただいたのち、2009 年に足寄に戻り現在に至ります。

ーモデルハウス兼自宅として「木組みの家」を建てられましたが 建設に至った経緯や完成後の反響、感想などを聞かせて下さい。

帰省を決めた時から、北海道で木造伝統構法の住宅を建てることが目標のひとつでした。現在、北海道で伝統構法の家づくりを実践しているのは、私の知る限りでは 1 社です。在来工法とよばれる近代的な工法でさえ、最近では工場での機械加工が主流で大工さんの技能が必要とされる場面がほとんどありません。人の代わりに機械でできる仕事であれば、わざわざこの業界に入ってくる若者はいなくなって当たり前です。今の若い人たちは賢いので食いつぶされるのが目に見えているところには近寄りません、仕事に付加価値を感じないと見向きもしません。ですから、若い人たちが憧れるような魅力のある仕事づくりを追求し、まずはこの業界に興味を持ってもらうことから始めなければいくら福利厚生を充実させても綺麗ごとを並べても建設業に人はきません。そういう建築業界の構造的な問題も見据えたうえで「木組みの家」の建設を進めてきました。完成後の反響は、今のところ集客というよりはもっぱらメディアの反応の方が顕著です。住宅雑誌やインターネット媒体の取材もいくつか受けています。こんな田舎の工務店にすぐに反応してくる東京や大阪のメディアのアンテナの張り方には正直驚きです。モデルハウスということでお客さんの家では試せない実験的な要素も多く含んでいますので、いずれにしても受注につなげるには結果が出る一年後くらいからだと考えています。

ー十勝で日本の伝統的な家づくりを実践する難しさ、工夫すべきところ、住むことのメリットや楽しさを教えて下さい。

十勝だから難しいという事はこれといってありません。もちろん冬季間の施工は現実的ではありませんが、うまく時期を考えて冬季間に工場ですぐに柱や梁を加工するタイミングに充てれば通年雇用の可能性の幅が広がりむしろ働く人にとって良いと思います。工夫すべきところは全国どこでも同じですが、その地域で育った木材でつくるのが良いと考えます。その環境に最も適していますし輸送コストも抑えられ環境負荷も軽減されます。「木組みの家」

も十勝産のカラマツ無垢材を使用しています。住むことのメリット。これは個人の価値観になるので一概には言えませんが、私は自分の家族を住ませる家は天然の素材を基本とした家がよいと思っています。無垢材を中心として、紙クロスや天然塗料を使用することで空間が独特の存在感を放ちます。メリットなのかどうかはわかりませんが、気持ちが安らぐのはたしかです。こどもたちも、無垢材の床に寝そべって頬ずりしたり、柱や梁がむき出しになっているのでハンモックをかけて楽しんだり、今までのアパート暮らしでは見られなかった反応をしてくれています。

一 帰省した時と現在の青年部の違い、青年部長を経験して得られたことをおしえてください。

青年部については、帰省する以前から自分なりの思いがあります。京都で大工修行をしていた頃に、お盆休みで里帰りをして青年部に入部している同級生に会った時です。彼らの会話の中に、青年部の活動について真剣に考えている様子がうかがえました。当時の私は自分の生活と将来の事しか考えていないのに、彼らは自分の事と同じように町のことを考え行動していました。衝撃的でした。このろくでもなかった奴らがと笑。このことが足寄に帰省することを決めるきっかけのひとつにもなりました。

青年部に入部した当初からいつかは部長の任を仰せつかるだろうと思っていましたし自分なりの準備もしてきました。当時と現在の大きな違いは、部員数でしょうか。当時は十数名だったと思いますが、現在は 30 名まで増員しました。部員対象年齢が 45 歳に引き上げられたことも要因ですが、賛助部員も含めて色んな人が青年部に入部してくれて活動を支えてくれています。当時より、多国籍になったイメージです。これは良い傾向だと思いますし、どんどん新しい人が入ってきて新しい風を吹かせてもらいたいです。新入部員の皆さんには感謝しています。

部長経験で得られたこと。一番に言えることは人生観が変わりました。前述した同級生の例のように、自分の事のように町の事を考えるようになりました。それまでは、当たり前と言えば当たり前ですが自分や自社の商売ありきで行動していたように思います。ですが部長経験を通してもう少し広い視野で物事をとらえるようになれたかと思います。現在、足寄に移住者を呼び込むための事業を計画していますが、その考えに至ったのも青年部長の二年間があったからこそだと思います。町が良くなしないと、結果自分も良くなり得ません。ただ、それは行政や誰かがやってくれるのを待つのではなくまずは自ら考え行動しなければならぬと思います。

一事業承継のタイミングやきっかけは？ 若手後継者として必要なことは。

承継のタイミングとしては、建設業許可の代表者変更が可能になる年数に達したことです。年齢は私が 35 歳、父が 66 歳、特に遅らせる理由もありませんし。実質的な事業についてはまだまだ承継しきれていない部分もありますが、父が 60 代のまだ目の黒いうちに会長職についてもらいバックアップしてもらえることは良いことだと思います。

若手後継者としては自分もまだまだ駆け出しですが、動きまわる事しかないと思っています。自分ひとりでできることなんてたかが知れていますし、一人でも多く味方や支援してくれる人を増やすには 100 考えるより 1 の行動だと確信しています。この、人から助けてもらう能力は世の中を生き抜くうえで一番必要となる能力だと思いますが、これは学校で習うことではありません。社会に出て、いろんな人の話を聞いて自分の価値観と違う相手を認める姿勢を持つことで初めて身についていくものだと思います。そういった意味で、20 代に全国のいろんな地域でいろんな人やいろんな考え方に触れられた経験は今の自分の原動力になっています。

事業概要

名称 株式会社木村建設

代表 木村祥悟

住所 足寄町旭町 4 丁目 24 番地

電話番号 0156-25-2529

事業内容 特定建築工事業、一般住宅設計・
施工、リフォーム、インテリア物販

創業 1966 年 3 月



次回予告

次回のインタビューリレーは北十勝ファーム 上田七加さんを指名します。お楽しみに！